



始めること、続けること



カトマンズのストリートチルドレン

ネパール、カトマンズの路上で生活する子ども達がいる。どうしてこうなるのか、親の事故死、遺棄、など背景は様々である。ネパールの夜は寒い。恐らく寒さをしのぎながら夜は歩き回っているのだろう。朝になると、路上の陽だまりに固まって横になっているようだ。見れば、本当にまだ幼く、寝顔もあどけないが、死んだように眠っている。何か心が動かされる気がする。現地の友人が水と食料を調達してきた。すると急にどこからともなく、リーダ格の男の子が現れた。汚れたズボンのポケットからおもむろに携帯を取り出すと連絡をとっている。そして今日の前で眠りこけている子どもたちを蹴飛ばし始めた。ここから出て行けというのだろう。そうこうしているうちに、彼の仲間なのだろう、十数人の別の子どもたちが集まって来た。蹴飛ばされた子どもたちは、人ごみの中に消えていった。いったい何処に行くのだろうか。何か、その後ろ姿は、このまま社会の狭間どころか、永遠に消えていくようにすら思われた。集まった子どもたちが、次々と食料を手にして、バラバラに散っていく。こんな働きでは、何の解決にもならないだろう。

現地の人たちと何ができるか、話し合った。恒久的に教育と社会就労につながる働きにするには、基本的な生活習慣から教えていく必要があるだろう。いろはから根気強く基本的な学力を身に着けるように、やり直しに取り組む人材も必要だ。励まし、力づけ、愛し、心を育てる教育者と、プログラムが必要だ。結局人は、愛され、

育てられた程度にしか生きることができない、と思うことがある。

フィリピン・セブの貧困地域で行われた教育支援プロジェクトは、実に長く支援をいただき、最近ようやくその成果を実感するようになった。大部分の子どもたちは、大学教育を終了し、成長して、技術者、ソーシャルワーカー、学校教師などとして活躍中である。そこまでに至る長い支援を感謝するのみならず、現地スタッフの目には見えない多大な現場の苦勞を思うところである。実に、教育にはお金も時間もかかる。しかし、かつて貧困地域で暮らしていた子どもたちは、仕事をもち、伴侶を見つけ、新しい地域に家を構え、新しい生活を始めている。嬉しいことは、そのように育てられた子どもたちが、今、同じ同朋の貧困地域の子どもたちの生活自立支援のために、働くようになったことである。

HFI では国内でも 3.11 の東北被災地での奨学金プログラムを続けてきた。通算で 25 名の子どもたちに支援を続けている。うち 5 名が今年、高等学校を卒業し、それぞれの道を歩み始めた、との報告があった。HFI の新しいプログラムが、ネパール、フィリピン山間部で始まり、東日本大震災の被災地でも継続される。皆さんのさらなる強力な支援をお願いする思いである。(HFI 代表 福井誠)

CONTENTS

- 特集① 新規プロジェクト
フィリピン、ネパール、モンゴル …P.2, 3
- 被災地支援の現場から
宮城教育大学 教育復興支援センター
特任准教授 小田隆史さん …P.4
- フィリピン活動報告
MHDSO、MHCPC …P.5, 6
- 特集② スタディーツアー
フィリピン体験記、今後の予定 …P.7, 8
- ジョイ・ジョイ・ブック 他 …P.8